

## 報告5「大学教育の改革とファカルティ・ディベロップメント (FD)」

樋口 聡 (文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室長)

文部科学省大学改革推進室長の樋口です。本日のシンポジウムにお招きいただきましてありがとうございます。それから、田中センター長をはじめとする京大センターの方々、特に田中センター長のこれまでのご功績に関して、私どもとしては厚く敬意を表したいと思います。

われわれはこのセンターを、平成21年度に大学教育の共同利用拠点という形で認定しています。そうしたことから、日ごろからいろいろな形でお付き合いは深いですが、本日はこういう機会なので、高い所からではありますが幾つかコメントさせていただきたいと思います。時間が15分から20分ということなので、手短にしたいと思います。パワーポイントを用意すべきだったのかもしれませんが、申し上げたいことは発表論文集に書いてあります。本日はここに書かれている中身を少し順序を変えて申し上げつつ、コメントと言われましたので、最後に四つのことをコメントとして申し上げます。お聞きしたい点もありますので、少しコメントさせていただきたいと思います。

### 1. 日本教育のこれまでの経緯とこれからの課題

初めに、今日の基調講演の中で田中先生がおっしゃっていた日本の教育のこれまで歩んできた歴史的な経緯というものの中で、流動性というか凝固できないということになって、そういった時代変化をとらえて相互研修型をご提案されている背景認識に関しては、私どもとしてもかなり共有しています。皆さん、言わずもがなだと思いますが、グローバルな知識社会ということで、よくイノベーションという言葉が、研究開発あるいは科学技術の分野で言われるようになりました。実はこうしたイノベーションに相当するものは、知恵で競争するということです。こうしたものは科学技術の分野に限ったものではなく、社会生活を営んでいく上で、さまざまな局面で、程度の差こそあれイノベーションが求められています。従って、進学率の上昇という話がありましたが、日本が経済成長したことが一つの要因ではありますが、もう一つは、そうした中であって教わるべき中身がかなり増えてきていること。それとともに、そうしたことを引き出しとしながら、自分で課題を見つけて探究していくという学修の視点がかなり重視されるようになってきています。そういうことがあって、近年、大学の進学率が上昇しているのだと思います。

しかし、そのことが一方で、多様な学生を大学が受け入れるということになります。また、教育と職業との関係がかなりあいまいになってくる。先ほど先生がご指摘されていたとおりだと思います。こうした中で、大学の中もそうですが、外側から申し上げれば、進学率が増えて多様な学生を受け入れるようになった大学に対して、機能別分化が一層求められるようになってきていることにはそういう背景にもあると思います。そうした学生の多様化と加えて、出ていく先の職業との関係がかなり希薄になってきていることから、入り口の段階で学生の質を担保することは不可能に近い状態です。出口までかけてどのようなことができる学生を育ててきたかという意味での質保証が問われるようになってきています。逆に、学生の立場からしてみれば出口が見えにくい状況があるので、学修に対するモチベーションをどう維持し、高めていくかは今日的な課題になっていると思います。

そうした中でわれわれ文部科学省では、中央教育審議会でも近年大きな議論として挙げているのが、一つは学位プログラムの確立、構築です。専攻といった組織から学位課程、プログラムとしての教育を確立していくというものの考え方の転換があり、そうしたものを通して学修の密度を高めていくことを、今日大きな議論として掲げてきているところです。学生側から言えば、学修時間を増やし、確保するということです。今、中央教育審議会でも学修時間を増やし確保することをキーワードとして、かなり密度の高い議論をしています。われわれは昔、学士課程教育答申を出しました。そのときは学士力の一つのキーワードにしていたことが、今、大学教育部会で議論している学修時間の確保については、いろいろなことをやってきていますが、私個人的にはかなり根幹的なテーマとしてかなり踏み込んで議論していると思っています。

ただ、大学が拡大していくということは、組織論から言えば、大学の授業が徐々に分散化し、細分化していくこと

は世の常です。そういう中で、冒頭で申し上げましたが、自ら課題をとらえていく能力を身に付けていくことが大事だとすると、そうした分散化、細分化ということはある意味逆行する面もあります。そうした中で、世の中でジェネリックスキルやトランスファラブルスキルというものが言われることも一つの背景にあると思いますし、また体系化や統合、連携が大きなキーワードになってきているのは世の必然だろうと思います。

こうした流れの中での体系化、統合、連携が、今日におけるFDの意義を形成しているのではないかと私どもとしては認識しています。従って、FDというものは組織的な教育の取り組みの中で組織的に研修を行っていくものであり、一人の教員だけで完結するものではないのではないかと考えています。そうしたことを認識しているわけです。これは若干個人的なことが入っているかもしれませんが、こうした流れを踏まえて四つコメントを申し上げたいと思います。

## 2. 内部質保証との関係

一つは、先ほど高橋先生からもありましたが内部質保証との関係です。FDというものは、先ほどから申し上げているような背景からして必然的にピアであり、ボトムアップであり、上からトップダウンで行うものではないと思います。従って、国も大学設置基準の中にFDの規定を置いています、合理的な範囲に限定して書いていることをご理解いただきたいと思います。ただ法規の方に書きますと、それだけやればいいのかという話になるのが世の常で、大学の大綱化のときにもそういうことがありました。書いていないことはやらなくていいという話が反対返しとして起きてしまうことがあります、決してそういうことを意味しているのではないということは、大いに強調しなければいけないところであるので、要項にも書かせていただきました。

つまり教育の体系化、どのような能力を身に付けさせるかというポリシーを明確にし、それに見合っって個々の科目を束ねてどのようなカリキュラムを構成し、そのための効果的な教授方法、教育方法を編み出し、あるいは学生をアトラクトするような教育方法を編み出し、そのための教育力を付けていく。こうした全体の教学システムの中にFDが位置付いていることが非常に大事だということは、法規に書くまでもなく申し上げなければいけないところだと思っています。

ただ、総論ではそうだと申し上げますが、それを具体的に回していくためには声だけではなかなかうまくいかないところがあります。そのためには、やはりさまざまなツールも必要だと思います。例えば、シラバスはコースディスクリプションとは違うという考え方や、ナンバリング、あるいは先ほどありましたティーチングティップスやポートフォリオ。今日、取り上げられているようなさまざまな分科会のテーマは、そうしたものを現実に回していくために不可欠なツールであり、仕掛けでもあると考えるわけです。

そういうものを、私どもはある意味優れた事例ということで Good Practice (GP) という形で支援してきたところはあります。ただ、課題は、ある意味で一つ一つの優れた実践をいかに横展開していくかということだと思います。そうした意味で、それを学内においてはもちろんですが、学外でも共有していくことは大事なことです。現実的には、教学システムを回していく意味での優れた実践や具体的な課題を共有していくために、こうしたセンターの取り組んできている取り組みは私どもとしては非常に有意義だし、ありがたいと思います。ただ、これを内部質保証システムにまで返していく努力が必要になってくると思います。皆さん、意欲のある先生方がお集まりになっておられると思いますが、こうした取り組みを皆さま方がそれぞれの大学に持ち帰られて、それぞれの大学の中でいかにこのつぼみを花咲かせていくかというプロセスが重要です。これをどう展開するかが、私どもにも課せられている課題ではないでしょうか。われわれはGPをやってきましたが、GPのテーマを横展開するために、一つの学部での取り組みではなく全学的に、一つ大学の取り組みではなく大学間で連携してというようにスコープを広げて、支援の仕方を変えなければいけない時期に来ているのかもしれないと考えています。そうしたことに對して、皆さま方がどのように受け止められているのかということが、一つの伺いたい点でもあります。

## 3. 学位プログラムの構築との観点

2点目は、学位プログラムの構築との観点です。専攻ごとに課程を編成して学位を出していき、何々学を学んだということが大学の教育の基本であることには変わりありません。しかし、社会が求めている能力は、そうした課題を

探究する能力です。つまり何々学を学んだということにある意味では付加するような形で、何々ができるようになったということも大学教育の出口として求められるようになってきているということです。そうしたことから、特に組織という枠組みを超えても、学位プログラムが必要だと言われているのだと思います。そうしたことから、恐らくこれからそれぞれの専攻や学科、学部や大学院の研究科の中でいろいろなプログラムが出てくると思います。これはあまり言うてはいけなかもしれませんが、今、出来上がっている専攻のきちんとした教育をわれわれは否定するつもりはありません。しかし、社会的な課題に対応して、何ができるようになるかも重視したプログラムができてくるとなったときに、そうしたプログラムに魂を入れていくのは、こうしたFDのセンター的機能の一つの大きな役割ではないかと思っています。従って、大学改革の中でさまざまな大学がさまざまなプログラムを立てるところに集まってくる教授団の魂を入れていくためのFDの専門的な知見の注入が、私個人的にはかなり重要になってくるのではないかと思います。

#### 4. 大局的な視点を持つこと

三つ目です。この二つは少しプラクティカルな話かもしれませんが。大きな話を二つ、残りにしたいと思います。

一つは、先ほど田中先生が基調講演の冒頭で、歴史的な経緯から相互研修型が必要だと言われました。われわれ役所はさまざまな細かい施策を打っていきます。予算もそうですし、さまざまな制度改革もあるかもしれません。私が言うのもあれかもしれませんが、その一つ一つに振り回されているという面もないわけではないかもしれません。それはある意味で、われわれも反省しなければいけない点だと思います。ただ、大きな歴史の大局の中に、中教審の答申や施策などを位置付けて考えることができる部分が多いことも確かだと思います。従って、特にFDに中心的に携わっている先生方においては、役所が言っていることを受け売りにするというよりは、こうした大きな歴史の中において、こうしたことが求められているのだらうというような、実践とは別の形で大局も忘れていただきたくはない。ある意味では、そういう観点からわれわれに意見していただくことも大事だと思っています。あまり言うてはいけないうのかもしれませんが、そんな認識を持っています。

#### 5. 学生をFDにどう位置付けるか

最後に、これはもう少しシビアな話かもしれませんが。FDは、教授集団を組織的に構成していくための取り組みだと言われます。しかし、こうして大学が大衆化して、ユニバーサル段階を迎えています。大学の中における学生の存在が非常に大きくなっていることは確かです。四つ目の課題は、その学生をFDの中にどう位置付けるべきかということです。先ほど、山田先生は、アクターという位置付けをプレゼンテーションの中でされました。田中先生の著書の中に、教授と学生という非対称性が崩れてきているという話がありました。そうした中で、教授組織のFDというもののの中に学生をどう位置付けるべきなのでしょう。欧州の会議では、学生はステークホルダーだともよく言われます。それとも学びの共同体の一員なのか、やはりサービスを提供しているお客さんなのか、あるいは従わせる存在なのか。その辺のところの位置付けを、今日的にどう位置付けていくべきなのか。特にFDという観点でどのように考えているのかは、今後論点としては考えるべき視点ではないかと思っています。

#### 6. まとめ

大事なことは、今の話は別としても、FDを考えるにおいて大学は学生の視点を抜きにして考えることはできません。学生の将来は不確実性が伴っているがゆえに、一人一人の学生に立脚して、その将来のためにその能力を形成していく責務が大学教育の中にはあると思います。時に社会と並走して、時にある意味ではみっちりトレーニングして、社会に送り出すまでのトラックを大学が担っています。そういう意味で、これまで以上に学生の立場に立って、学生の将来を見据えた大学教育に対してという視点をFDの中に少し組み込んでいただければとお願いする次第です。

こういう形でコメントというのは、なかなか役所の人間としては慣れないことですが、述べさせていただきました。話は以上にさせていただきます。ありがとうございました（拍手）。

（松下） 樋口室長、ありがとうございました。四つのコメントはいずれも非常に重要で、ぜひ重く受け止めて進めて

いきたいと思います。

1 番目の内部質保証という点は高橋先生からもコメントがありましたし、2 番目の学位プログラムの構築と FD の関係も、いずれの方からもコメントをいただいた内容でした。それから 3 番目のコメントはやや意外だったのですが、あまり政策に振り回されるな、大局的な視点を持ってその中にむしろ政策で出てきたことを位置付けてほしいという力強いコメントでした。応援・エールをいただいたような気持ちです。それから 4 番目に、学生をどう FD に位置付けるかという点をあげられました。今回のフォーラムにおいて、自由研究発表の中でも、それからラウンドテーブルの中でも、学生 FD、学生・職員とともにつくる FD、学生の学びと FD をどう関連付けるかといったテーマが入ってきています。これから私たちとしても FD の大きなテーマとして考えていきたいと思います。

以上でパネリストからのコメント、セッションは終わります。ここでいったん休憩を入れさせていただきたいと思います。ただ今、4 時 15 分です。先ほどは 10 分しか休憩がありませんでしたが、ここは 15 分取りまして、4 時半から再開させていただきたいと思います。よろしくお願いします。

—休憩—